

生活文化の教材化(その1)

——金沢市における産育信仰の形成——

豊村洋子*・生活文化研究グループ**

Towards Making Instructional Materials which relate Traditional Culture to Daily Living in Japan (Part 1)

- About the Role of Religion in Child Birth and Care in Kanazawa -

TOYOMURA, Youko* and Life and Culture Research Group**

Summary

< Object >

The aim of our research is, first, to investigate those aspects of Japanese culture that closely relate to daily life in Hokuriku Prefecture and, second, to make teaching materials of Home economics for primary, junior and senior high schools. This time, we investigated the worship of the Goddess Kishimojin in Kanazawa and also the form of parents' prayers for their children's healthy growth.

< Procedure >

1. Literature survey of the goddess Kishimojin.

* 豊村 洋子：金沢大学教育学部	** 永原 朗子：石川婦人少年室
** 荒井 紀子：金沢女子高等学校	** 張江 和子：石川県立西高等学校
** 小間井 潮：石川県教育委員会学校指導課	** 松本 良子：金沢市立森本中学校
** 辰巳 明子：金沢大学教育学部附属小学校	
* TOYOMURA, Youko	: Faculty of Education Kanazawa University
** ARAI, Noriko	: Kanazawa Prefectural Women's High school
** KOMAI, Ushio	: Ishikawa, The Board of Education
** TATSUMI, Akiko	: Attached Primary School, Faculty of Education K.U.
** NAGAHARA, Akiko	: Ishikawa Women's and Juvenile's Section
** HARIE, Kazuko	: Nishi Prefectural High School
** MATUMOTO, Yoshiko	: Morimoto Municipal Junior High School

2. Survey to determine the awareness of families in Kanazawa of devotion to Kishimojin for safe childbirth and care. The questionnaires were sent to primary, junior and senior highschool students in Kanazawa, and to their parents.
3. Survey of visitors to Shinjyoji, known as Kishimojin Temple.
4. Survey of Kimonos, especially of HYAKUTOKO - kimonos which were offered to the Temple as thanks for safe childbirth.

〈 Result 〉

Through this investigation, the following results were obtained:

1. Faith in the Goddess Kishimojin (the Shinjyoji is one of the centers of it) plays an important role in cultural attitudes towards child birth and care in Kanazawa.
2. The number of baby's kimonos offered to Shinjyoji were three hundred and eighty one. Included were twenty eight special kimonos named Hyakutoko. Twenty of these had SEMORI (a kind of embroidery on the back), in which we can see the parents's prayer for their child's healthy growth.
3. There are some differences between sexes and generations concerning the role of faith in child birth and care.
4. Shinjyoji is better known as Kishimojin among children and parents than expected. This reflects Kanazawa's character as a castle town in which there are many temples and shrines.

The results of the investigation are not sufficient to make teaching materials, so we continue our research.

はじめに

本研究の目的は、北陸地方の風土と密接に関連した衣・食・住生活その他の特徴的な生活文化を調べて、小～高校における家庭科教育教授用への教材化をはかり、利用に供することにある。

家庭生活は人間生活のあらゆる基盤であり、出発であり、帰結であるということを前提として、今回は、その家庭生活の中心課題でもある「子どもを生み育てる」こと、わけても「子育ての心」にふれるようなテーマに接近することを試みた。卯辰山中腹にある人形寺の奉納物の話は、極めて金沢らしい生活文化の響きがあり、私達をひきつけた。

調査の過程で、鬼子母神信仰や宗教・信心に

かかわる文献学習も必要とされたが、「子育ての心」は、主義・主張、時間的空間、場所のいずれをも超えて貫く永遠のものであると思われる。たゞ、産育信仰における祈願の形としては、それぞれである。

まだ調査は未了であるが、ひとまず、これまで調べ得たことについて報告をしておきたい。

I. 産育信仰の形成小史

金沢の東山にある日蓮宗真成寺は、天保四年（1647年）に小松に創建されたが、加賀藩三代藩主利常の死後金沢に移り、13年間仮寓の後、寛文11年（1671年）に卯辰山の現在地に建立された。堂内には小松城主丹羽長重より依託されたと伝えられる鬼子母神が祀られている。以来「卯辰の鬼子母神さん」の愛称で親しまれ、

今日においても宗派を問わず安産や子育てに靈験顯かとして著名で、昔と変わらず庶民の信仰を集めている。

鬼子母神は、わが国においては、古くから産育信仰として庶民の間に親しまれている。この信仰が紀元の初頭、遠くインドの地に発祥し、中国大陸を経て我が国に伝播し、民間信仰として根付いた時には、伝承の内容が若干変容していることも考察されている¹⁾。

1. 鬼子母神信仰の形成過程

1) 鬼子母神信仰の起源と変遷

鬼子母 Hārīti が仏陀によって教化されるという有名な説話を含む鬼子母説話の最古の型はパリー系經典の中にみられる。それが仏伝諸經典を通じて大乘諸經に及び密教系鬼子母經もこれと同じように經論の中に撰取されたと思われる。その成立地はこの部派の根拠地であるインドの北西部ガンダーラ・カシミールのあたりで紀元二世紀の中葉のころと考えられている。ガンダーラ地方は仏教芸術の発祥地でもある。前述の『鬼子母經』はパンチカとハリティーの土俗信仰を仏教の立場からとりあげ、これに仏教的解釈と地位が与えられた現存する最古の文献である。ここでは、鬼子母が愛児を隠されて、それが動機で仏陀の説法をきく物語である。仏教はインド本土では民族神のブラフマーやインドラなどの帰仏を得た形をとり、これら諸神を仏法の守護神としてカシミールやガンダーラの辺境地帯に伝播し、ここで、パンチカとハリティー土俗神とのあいだに関係と交渉をもつことになったのである。

ペシャワール博物館には出地の明確なパンチカ神とハリティー二神並坐の彫像がある。この像はハリティーが末子のピンカラを抱き、その肩や膝のあたりには、ほかの子供がまつわっている夫妻と 500 の子供をあらわした家庭神の群像である。この夫婦神の性格は時代とともに推移し、或は地域的にも変容しているが元来、この夫婦神は小児の病魔を擬神化した土俗神であっ

た。しばしば流行蔓延して多数の死者をだす伝染病・疫癘の猖獗や天然痘を祟や咎と神格化して、この神々を祀り懐妊・安産・育児や子女の病氣平癒を祈願した、いわば疫神であり、瘡抱神であった。

多数の愛児にとりまともわれて、並坐したパンチカ神とハリティー夫妻のむつまじい構図の彫刻に、国境の都城ガンダーラの人々はこの夫婦神に子女の病氣平癒を願い、家庭の幸福を祈念したのである。この二神の持物に末子のピンカラを抱くほかに、武器の杖槍や柘榴や財囊などを持つのはその神の性格が次第に複雑化して多様性をもつに至ったもので、家庭神から守護神、生産豊饒の神、財宝神へと進化する過程を意味し、この土俗神の神威と神靈が昇華する姿となったものである。

その後数世紀を経た七世紀のはじめ、西域を経てインド留学をくわだてた唐の玄奘三蔵は、ガンダーラ国の梵釈塔の西北五百余里のところに鬼子母窣堵波(塔)のあったことを『大唐西域記』に記録している。この鬼子母塔は釈迦如来がここで鬼子母を教化し、それで、鬼子母は人々を殺害することをやめたとの伝説をのべ、ガンダーラの子供のない夫婦はこの鬼子母を祀って世嗣の子供をもとめる習俗のあったと玄奘は伝えている。この鬼子母こそ多産の女神ハリティーのことである。この鬼子母帰仏の縁起は『出三蔵記集』巻三に、鬼子母經一卷の經名をかかげているが、『鬼子母經』が、パンチカとハリティーの土俗信仰、鬼子母神の由来を述べているのは前記の通りである。これらの經典のパリエーションともいえる鬼子母因縁説話は、セイロン、西インド、西域、中国とさまざまな国土に伝わり、土着の人心に適應する形で、いろいろに解釈も加わり変容していったと思える。

2) 鬼子母神の日本の変容

我が国におけるパンチカとハリティーの信仰は平安朝の初期、入唐僧空海の真言密教の請来とともに「觀喜母并愛子法」や「訶梨帝母經」

が「三十帖策子」のうちに収められて伝来したのがはじめといわれる。天台僧承澄によって『阿婆縛抄』が編輯されその第140に訶梨帝母像が収録され、『賞禅鈔』や『別尊雜記』にその図録がある。

その後の鬼子母神関係の資料をさがすと『華頂要略』に建久六年（1195）の記事に「中宮御産御祈の為に『訶梨帝母15童子供』を修す」とあり、訶梨帝母なるものが御産と関係をもっていったことが想像できる。しかし、訶梨帝母のみが一件の御産に係わっていたのではなく、多くの行法が適宜選択されていたようである。また、社会的・政治的にも混乱が増大する時代背景もあり、貴族階級の件であっても、一個人の産の無事を安閑として祈る余地がなくなってきていることも示している。貴族の没落と、庶民の側からの祈りへの欲求の高まりは、それまでの権威的で伝統的な各種の行法が、一般に理解し易い形に代えられていったものと推察されるのである。

3) 鬼子母神と宗教

鬼子母神は、宗派を問わず信仰の対象になっていることについては既に述べた。しかし、現在、鬼子母神を実質的な守護神としているのは日蓮宗であるといえる。東山の真成寺も日蓮宗であるので、私達は、全く宗派にはこだわらないことを前定に、鬼子母神信仰と日蓮宗との関連をみる必要があろう。

鬼子母神の古くは、天台宗や真教において信仰されていた。しかし、鎌倉期あるいは南北朝の戦国動乱を経、また武家階級の弱体化に伴い、逆に民間信仰として急速に広まった日蓮宗の発展に連動して、法華教の守護神である鬼子母神信仰も日蓮宗に移ったとみなされる。

現在、金沢の街の内で信仰の対象となる寺社は260を容するという。子育て・子産みに関わる社寺も幾つか数えられる。真成寺については、寛文11年（1671年・既出）に建立されているが、卯辰山山麓寺院群の中にあり、城下町の町

人と、東廓も同じ東山一帯のたたずまいに入る。祈願をよせる側からみても、自然なかたちでの産育信仰形成が可能であったに違いない。

2. 子育ての伝承と育児儀礼

1) 親の業と産育信仰

いささかおどろおどろしい言辞になるが、子どもを育てるといふ苦勞は、並大抵のことではないのである。人間には、生死の不安があり、その上、愛憎の悩みがある。可愛い者との別れ、憎い者と共にいる、愛別離苦、怨憎会苦、という言葉があるが、仏教では業縁の苦悩であるといっている。この不安と苦悩の中から離れる方法はないかと思う心が信仰の世界へと広がっていくものと考えられる。

子どもを育てるといふことは、親の仕事（業）であると思うが、それは、親が親らしい仕事（修業）をすることによって、親の業を果たそうとする行為を指す。この親の責務は、子育てへの熱情と深く関り、それが人づてに聞いたことであるにせよ子育てに少しでもプラスになるとあれば、宗派にとらわれず、ひたすら求め、親の業を果たそうとする「信仰」の所業がある。

例えば、本稿が各論で主としてとり上げる卯辰山の真成寺にある授子祈願や安産祈願のための絵馬や、底付柄杓に託して奉納された品々、寺のお礼、妙薬、お洗米をいただき毎日忘れず服用すること、また祈願成就のお礼奉納など、これら産育の所業が親の願いの現われと思える程に供養の形をとり、親から子、子から孫へ、または、人から人へと伝承されているのを見ても、そのあらわれが分る。子を思う親の気持ちはいつの時代も変わらないものであるが、ことさら、母親の子を思う優しさが、いろいろな奉納物にあらわれている。奉納物が母親の手になることから、この土地に伝わる染物や布の織りや刺繍が使われ、目を見はるような文化の深さを感じるものが多くみられるのである。このような宗派を超えた産育に関する信仰の場に置かれる様々な奉納物は、その土地の歴史や風土に

根づいた伝承の重厚な存在感がある。

2) 育児儀礼と信仰 - 妊娠, 安産, 子どもの成長祈願について

人間の存在は、愛しいものである。中でも子どもの成長に伴ってある百日目の食い初めや腹帯などの育児儀礼は数多くあるが、いずれも母親のひたむきな思いが哀切といえるほど横溢している。子が親を慕う以上に、親は子を思うのが常である。それは他の動物にない人間だからこそ抱く深い思いなのである。わが子故に無気になる。恥を忘れることを、低い生活感覚だと

表 I 真成寺奉納産育資料分類表

大分類	小分類	点数	計
1. 着物類	①百徳着物	28	381 *1) (286)
	②背守着物	113	
	③紋付着物	29	
	④その他の着物	211 *2) (116)	
2. 柄杓	①底付柄杓	168	223
	②底抜柄杓	55	
3. 履物	①下駄類	69	97
	②草履類	28	
4. よだれかけ		22	22
5. かわらけ		13	13
6. 絵馬	①鬼子母神絵馬	43	58
	②児童遊戯図等絵馬	15	
7. 提灯		237	237
8. 人形		7	7
9. 千羽鶴		23	23
合計		966	*3) 966

* 1) ()内重文指定

* 2) " "

* 3) 重文指定

出典：金沢市教育委員会，真成寺
奉納産育信仰資料，2ページ(1983)

誰が言えようか。

子を思う親，特に母親のそのさまは，時に壮烈な変身をした夜叉神（五戒を守る神となった鬼子母）に似てはいないだろうか。参る人が吉祥果（ざくろの実）を捧げて鬼子母を祀るのは，母親の我が子可愛さからくる祈りの所業なのである。

3) 育児儀礼と奉納物について

子どものために，母親が自給自足的に作られてきた奉納物は，民俗信仰やその土地の年中行事などの習俗に結びつくものが多い。

金沢のように藩制時代の風俗を残している城下町には育児に関する玩具が多く見られ，その品々が，即，奉納物として残されている。それらの品々は江戸や明治時代に作られたものが多く，土地の生活，風俗を反映しているいわば，民俗玩具的な要素をもって，見る者に親しみをもって迫ってくる。

それらのうち，「キモノ」の一部を，次章において述べるつもりであるが，真成寺の奉納物には，古き良きものへの郷愁があり，金沢の風土，この土地の原料，ここに住む人々の手技が放つ「思い入れ」のこもった不思議な光彩がある。

II. 資料にみる産育信仰の適応

1. 真成寺と奉納物

前章において，鬼子母神信仰と産育信仰との結びつきについて述べたが，その人々の篤い信仰心から，真成寺には，安産のお礼まいりや生児の健やかな成長を祈願して奉納された着物類をはじめ絵馬や柄杓など，産育習俗に関する資料が多数収蔵されている。なお，これらの資料は，全国的にみてもきわめて優れたものであり，質・量とも相まって地域的特色を示すことから，昭和57年4月21日に国の重要有形民俗文化財の指定を受けている。

ところで，真成寺の産育信仰資料は，金沢の地のみならず，県内外の広範囲の人々から奉納されていることと，江戸時代末から昭和に至る

各期の物が集まっていることから、子育ての実態と変遷の過程を知る上で貴重な資料となっている。またこの資料は、生活文化の時代的推移をも物語っている。しかし、何よりも、産育に関する庶民のひたむきな願いが、そして子を思う温かい親ごころがひしひしと感じられるとともに、祖母から母へ、母から娘へと営々と受けつがれてきた子育てのこころを思うのである。

この章では、真成寺の産育信仰資料をかたちの上だけで捕えるのではなく、かたちとこころの両面から捕え、これからの子育ての在り方を考える上での参考資料としたい。

2. 真成寺産育信仰資料

表Iは、国の指定を受けた約一千点近くの資料の内訳である。資料の特色をあげると、着物類は授子・安産祈願の成就の御礼や預け子（成長祈願や健康祈願のため子供を一定の年数に限って「お預け」して守ってもらうこと）の満期御礼として、また、体の弱い子供が丈夫に育つようにと祈願して奉納したものであるが、奉納された着物はしばらく鬼子母神に着せた後、寺に保管するようになっている。柄杓は授子祈願や流水願い、履物は早く歩けるように、よだれかけは百日咳の治癒、かわらけは耳病治癒を祈願したものである。その他、授子や安産祈願などの諸事祈願や祈願成就の御礼に奉納された絵馬や提灯、千羽鶴、また預け子の身代りとして奉納された人形等がある。

3. 百徳着物と背守

1) 奉納着と一つ身

現在、真成寺には、400点近くにも上る着物類が保存されているが、産育信仰資料の中でも他に類例を見ない程、質・量ともに際立っており貴重なものである。その中でも奉納されている着物の概要と、特色のある百徳と背守について触れる。重文指定を受けた286点は、時代的に古いものや(着物の奉納年代別分類表—表II—

表II-1 着物の奉納年代別分類表

奉納年代 着物の分類	天保	江戸	明治	大正	昭和	不明	計
百徳着物	1	—	12	7	8	—	28
背守着物	1	31	38	26	17	—	113
紋付着物	—	7	19	—	3	—	29
その他の着物	—	5	25	26	56	4	116
合計	2	43	94	59	84	4	286

(※286点中39点は奉納年代がわかっているが) 247点については推定年代である。

1参照),特色のあるものが中心であり、形態上、百徳着物(多くの布切れを接いで作った着物)28点・背守着物(背守のついた着物)113点・紋付着物(家紋やざくろ紋などの紋のついた着物)29点・その他の着物(以上の分類に含まれない着物)116点に分けられている。

ところで、これらのうち約8割(238点/286点)は、一つ身(初生児から二歳ぐらいまでの子供に着せる背縫いのない着物)であり、他の2割方は四つ身、ちゃんちゃんこ(どんこ)、ベビー服等々である。しかし、一つ身と言っても、寸法的にはかなり小さい物が多く²⁾(身丈85cm以下の物234点/238点中、その内55cm以下の物124点)例えば、身丈36cm、衿38cm、肩幅16cm³⁾、袖丈15cmと言うように標準寸法(身丈90~100cm、衿33cm内外、肩幅10cm⁴⁾、袖丈50cm(ひろ袖)~21cm(筒袖))と比較すると身丈が非常に短い。普通一つ身は、布丈いっぱい大きさに作り、歩くようになると腰揚をするため、身丈は腰揚量を含み、90~100cmと長い。このことから、真成寺に奉納されている一つ身は、実用着として用いられていたものではなく、殆どが寺に奉納する目的で作られた着物のように思われる。

さて、真成寺の一つ身の中で、紅染めや麻の葉模様⁵⁾の物が目につく。昔から産着には魔除けの意味で、うこん染めとか赤色が用いられることが多い。また、生児が麻の葉のようにすくすく成長するようにと、麻の葉の模様が好まれているが、その風習が明治時代頃まで残っていたのだろう。ただ色彩については、かつては男女共に用いられた赤が、江戸後期になると一般的に女の子専用となってくるので、このことが真成寺の着物類にもあてはまるとなると、男児女児各々に対する親ごころを理解することも可能かもしれない。しかし、かなりの着物について男女別を見分けることが難しい(背守の糸印から見分けることの出来る物もあるが)ので、今後の研究課題である。

また、わが国の服装史からみれば、江戸時代後期から重ね着が標準となり大正期まで続くが、その同じ傾向が真成寺の着物類にも見られる。それで、目につきやすい袖口、八つ口、裾だけを二重にして重ね着のように見せかける、<比翼仕立て>もかなり見られる。材質的には、絹(ちりめん、富士絹、羽二重)、木綿、麻、毛とさまざまであるが、明治初年に輸入され次第に和服地として用いられるようになったモスリンや、昭和に入ってから登場する化繊類などが目につき、材質一つ取って見ても時代的推移がわかるようである。

2) 百徳着物

百徳はハクトク又はハクトコと呼ばれ、百枚もの小ぎれを隣人知己から貰い集めたり、あるいは自分で用意して、色彩的に調和をもたせて接ぎ合わせ、幼児着(一つ身)として縫いあげたもので、百はぎの着物とも言われている。

多くの小布を縫い合わせた幼児着を着せることは、体の弱い赤ん坊を、多くの人々の合力によって丈夫に育てようというところの表れに他ならないのである。

一般に百軒の家から貰って来ると言われているが、地域によっては三十三軒とか四十八軒か

表II-2 真成寺百徳の布きれ枚数別分類表

布きれの枚数	着物の表	着物の裏
1～9枚	0点	※8点
10～19	2	3
20～29	2	1
30～39	2	1
40～49	0	4
50～59	4	1
60～69	2	2
70～79	5	0
80～89	4	1
90～99	2	1
100～114	4	3
250	1	0
不明	0	1
裏なし	0	2
計	28	28

※8点中5点は、袷の裏側が百徳でなく1枚の布から出来ている。

表II-3 真成寺の百徳の形態別分類表

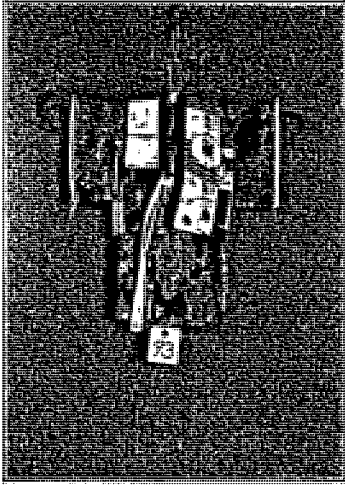
袷一つ身 ※(奉納着)	袷一つ身	袷どんこ ※(奉納着)	単一つ身 ※(奉納着)	単どんこ ※(奉納着)	計
21点	1点	3点	1点	2点	28点

※奉納着：奉納用としてサイズを小さくして作ったもの

らと言う所もある。真成寺に納められた百徳を調べてみると(表II-2参照)、丁度100枚のものは1点のみで、少ないものは12枚から多いものは250枚の小布から1枚の着物に仕上げている。百徳28点中23点が100枚以下で、そのうち11点は、袷仕立て(25点袷(表II-3参照))の裏側の端ぎれの枚数を合わせると100枚を越すなど工夫がみられる。しかし、布数は一定しておらず、丈夫に育った子供にあやかるため、数が多ければよいということなのだろうか。

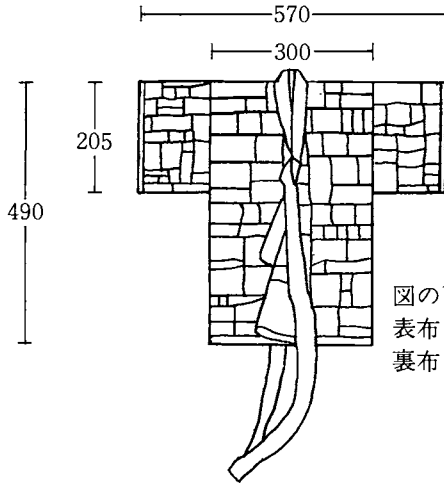
奉納されている百徳のなかで最も古いものは、

写真I 百徳着物



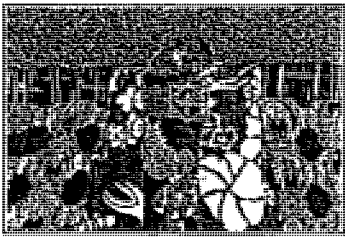
(写真と図の百徳は異なる)

図I-1 百徳着物の一例(ミリメートル)

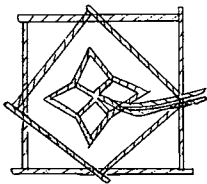


図の百徳の布きれ枚数
表布きれ 250枚
裏布きれ 5枚

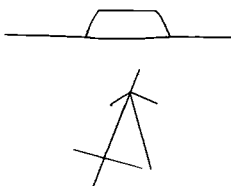
写真II 背守のある百徳着物



図I-2 背守(写真IIの背守の拡大)

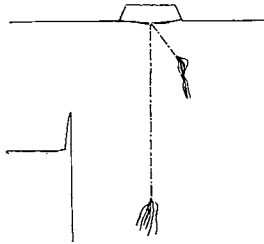


図II-1 背守



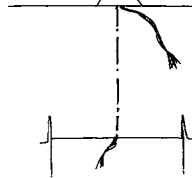
図II-2 背守

(糸じるし(灰色の糸))



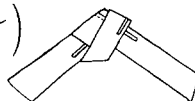
図II-3 背守

(糸じるし)



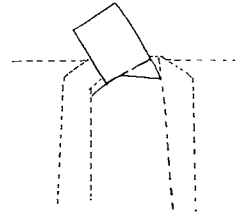
図II-4 背守

(結じるし)
(赤)



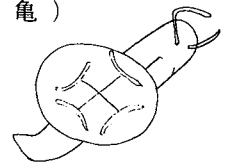
図II-5 背守

(長方形の布, 黄色)



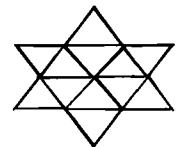
図II-6 背守

(亀)



図II-7 背守

(糸でかごめのしるし)
(白糸教本どり)



天保10年という年号銘がみられる物で、裏には題目が墨書されている。また、最も新しい物は、昭和50年代に奉納された洋服の端ぎれなどをミシンで縫い合わせたものである。以上28点中1点が江戸末期、12点が明治時代、7点が大正時代、8点が昭和の製作と推定される。ただ残念なことに、最近では手間のかかる百徳を作る人はいない。

ところで、百徳というのは、布の大きさや材質、色彩がバラバラなのに、それぞれの小布が一枚の幼児着の中に落ちていて非常に美しく見える。何げない小ぎれの数々が補強しあい、かつそれらが調和して美しさをかもし出しているのである。それはきっと、一針一針に心を込めて縫い上げた温かい親ごころが反映しているからであり、健やかな成長を願う親ごころが結実しているからであろう。

(写真I, 図I-1参照)

3) 背守 (背紋)

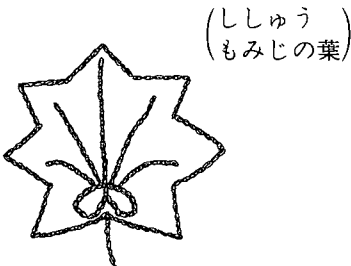
昔から背縫い目のない着物を着ると、背中から魔がさすと信じられていた。そこで、一つ身の着物の背中上部中央に背紋と言って、糸で縫い飾りをつける。(写真II, 図I-2参照)(ここでは背紋も背守に含める。)これは、魔除けとか虫おさえのためにお守りを縫いつけた名残りと思われる。背紋の模様にはたくさんの種類があるが、真成寺の着物類には、鶴亀、かごめ、結び熨斗などがある。(図II-4, 図II 6~7参照)また、こうした縫い飾りをしないで、ただ

方形の布きれを縫い付けてあるものもある。(図II-5参照)

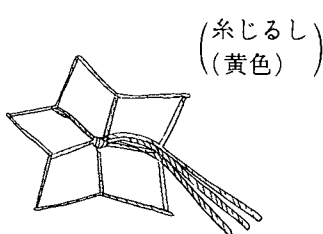
真成寺の着物の中で最も多く見られるのは、男女によって、縫い方は違うが、飾糸で縦と斜めに幾針かずつ縫った背守(セモリ)である。(図II-2~3参照)その縫いつける針の数から十二針ぬいと呼ぶところもある。糸を着物の丈と同じ長さにして、十二針のうち三針を男は左を尊ぶから左へ曲げ、女は右を尊ぶから右へ曲げるとか、女子は雌針、雄針(長い針目と短い針目が交互に出るように縫うこと)に縫って右に曲げ、男子は針目を表に出さないようにして縫い、上の方で左に曲げるとか、糸の端は男は切り、女は輪を結ぶとか、縫糸は長いほど子供が長命するから糸を長くするなどいろいろな言われるが、真成寺の着物の背守は、針目の長さも縫い方も一定していない。

ところで背守は、子供が火中や水中に落ちた時に産神に引っぱりあげてもらうためだとされている。真成寺の背守のついた着物は113点だが、その他に百徳着物に背守(背紋も含む)のついたものが18点、紋付着物に2点有る。それは、今日と異なり子供が育ちにくかった時代では、わが子の健やかな成長を念ずる親ごころが、種々の俗信を宗教と結びつけて、一心に信じ込んでいたからであろう。子を思う親の願いが、百徳とか背守という物(かたち)に託されているのである。

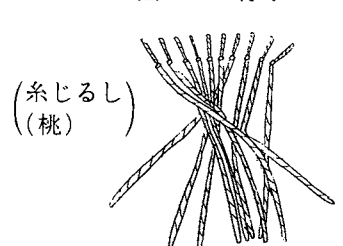
図II-8 背守



図II-9 背守



図II-10 背守



III 真成寺に見る現代の鬼子母神信仰

1. 真成寺参詣者の概況

この節では前章でも述べた真成寺の鬼子母神信仰が現代にどのように生きているかをみていきたい。その方法として真成寺参詣者の概数や性別、祈願の動機等の実態を知る「参詣者数」調査、および「聞きとり」調査を行なった。以下に調査の方法、結果および考察を述べることにする。

はじめに真成寺の鬼子母神を中心とした年中行事日程を掲げる⁶⁾。

- ・ 1月8日, 5月8日, 9月8日
 ……… 鬼子母神御祭礼
- ・ 毎月8日(1, 5, 9月を除く)
 ……… 鬼子母神御縁日
- ・ 2月3日……… 厄除け祈願
 生年月日による家族の星(黒星, 白星, 半黒星)に応じた星祈願をし, 厄除けの福豆を渡す(節分豆まきの代替)
- ・ 3月15日……… 涅槃会(涅槃だんごまき, 多彩な色のだんごがまかれ, 心ときめかせて年寄りや子供達が集まるといふ)
- ・ 4月8日……… 甘茶供養
- ・ 4月29日……… 人形供養
- ・ 8月8日……… 鬼子母神奉納着物虫干し

1) 調査日程

それぞれの御縁日や行事に参詣するのは、どのような人々で、どのような願いを託しているかをみるため、上記の日程に組まれている月々の8日に合わせ真成寺において調査をおこなった。

参詣者数調べ: 昭和62年2月8日, 午前8時~午後5時まで, 計603名

聞き取り調査: 第1回, 昭和61年9月8日~15名, 第2回, 同年10月8日~20名,

第3回, 昭和62年2月8日~36名
合計71名

2) 参詣者数

表III-1 参詣者数 (年齢は推定)

年代 \ 性別	女 (人)	男 (人)	合計(人)
乳 児	8	0	8
~ 3 才	17	11	28
4 ~ 5 才	17	10	27
小 学 生	18	12	30
中 学 生	3	2	5
高校~大学生	6	1	7
20 代	32	7	39
30 代	78	15	93
40 代	100	19	119
50 代	103	22	125
60 代	100	22	122
合 計	482	121	603

表III-1は、参詣者を年代別に示したものである。午前8時半より午後5時までの間に女性482人、男性121人の計603人が参詣している。この内105人が青少年で内訳は学齢前が63人、小中高校生が42人であった。また、友人、家族、夫婦連れが149組であった。

性別では女性が男性の4倍にもものぼり、年齢層では40代から60代が最も多く30代がこれに続く。男性は個人的な参詣は少なく、妻や家族と一緒にいる場合が殆どであることを考え合わせると、鬼子母神信仰を支えているのは30代から60代の女性達であることがわかる。

3) 参詣者の実態——聞き取り調査より

調査に応じてくれた人は10代から70代までの計71名で、年代の内訳は10代2名、20代8

名、30代14名、40代10名、50代14名、60代16名、70代7名であった。この内には、2人連れとして母娘2組(70才と45才・77才と57才)、夫婦1組(63才と58才)、嫁姑1組(28才と66才)も含まれている。なお、この内男性は3名である。

表Ⅲ-2は、聞き取り調査の結果から参詣者の年代的な特徴を示すと思われる例を各年代毎に1名選び示したものである。

以下、項目ごとの特徴をみてゆくことにする。

① 参詣の目的

「何の為に」「誰の為に」といった参詣の目的は年代毎に共通の特色がみられた。10代は本調査では2名のみで事例には示さなかったが、共に目的は”自分の幸せ”ということであった。20代になると多くの女性が結婚、出産の転機を迎え、それに応じて祈願も”自分のため”から”安産””子供の健康と幸せ”に移っていく。初産の安産祈願のほか、第1子の成長と第2子の妊娠、安産祈願、あるいは第1子の健康と流産した子の水子供養など、各々の事情に応じ祈願の内容はさまざまである。

30代では2つの型がみられる。一方は結婚後しばらく子宝に恵まれぬ女性達の授子祈願を、他方は小学生や中学生となった子供達の無事息災と健やかな成長を祈るものである。20代や30代は妊娠・出産、乳幼児の子育てという最も生命の神秘さ、微妙さ、弱さと向きあう年代であり、「何とか無事に生まれ、かつ育てほしい」という願いが鬼子母神との強い結びつきを生んでいることがわかる。

40代では子供が進学時期を迎えており「入試の合格祈願」が多かった。これに次いで「子供だけでなく家族全体の健康と幸せ」が参詣の目的としてあげられている。50代になると子の進学の他、子供が結婚、出産期に入る人もおり「子と孫のため」の祈願が増す。具体的には、娘の子授かりや安産祈願、あるいは孫の病気全快の願いといったものである。また「家族の健康のため」とか「自分のため」「仏の御加護を得るた

め」といったものもある。60代では「家族全員のため」「家内安全」が最も多いが、中には孫の大学受験の合格を祈るといった具体的な願いもある。70代もこの傾向は変わらない。

20代から70代にわたり共通することは、子の誕生と健やかな成長への願いが祈願の柱となっている点である。毎月8日に必ず参詣することで心の依り処を得ていると語る人が少なくなかった。子供の成長過程で遭遇する様々な試練の内、生まれながらの体質や事故、病気といった運命的、偶発的な問題と、入試、入社等の、ある程度本人の努力で乗り越える問題とが、親の立場からは共に同列の意味あいにおいて祈願されている点に特色がある。

② 参詣の頻度

参詣の頻度については、10代から40代までと、50代以上の年令層に若干の違いがみられた。前項でも述べたように、50代以上では、ほとんどの人が毎月8日にきまって参詣しており、そのことが生活の一部として根づいているようである。しかし、40代以下の年令層では、50代以上と同様、毎月8日に来る人が多い一方で、「初めて」「年に1~2回」「休暇のたび」「来れる日だけ」といった回答もしばしばみられ、年代が下がるほど自分の生活に合せながら、余裕があれば参詣するという姿もみられる。

なお、真成寺は日蓮宗派に属するが、鬼子母神信仰に関してばかりは、ほとんどがそれぞれの自家の宗派に関係なく参詣されていることも特徴的である。

③ 奉納した物

以前は授子、安産祈願の成就や虚弱児が丈夫になった御礼のために着物が奉納されたり、授子祈願として柄杓が奉納されていた。又、子供が早く歩けるようにと願って履物、百日咳の治療祈願としてよだれかけ、耳病治療祈願にかわらけ等が奉納されている。真成寺には、その他絵馬、提灯、人形、千羽鶴等々、子供の健やかな成長を願う諸事祈願や祈願成就の御礼に奉納される品物が数多くみられた。

表III-2 参詣者の年代別事例

年代・性別	事例1 20代・女	事例2 30代・女	事例3 30代・女	事例4 40代・女	事例5 50代・女	事例6 60代・女	事例7 70代・女
参詣の目的	夫婦と子供の健康と安産祈願	家族全員の幸せ	授子祈願	子供の健康祈願 (子供が弱かった)	孫と家族の幸せと健康祈願	お礼参りと孫の大学受験祈願	先妻の子供(長男)の結婚祈願
子・孫の年齢	・第1子 2才 ・第2子 (妊娠4ヶ月)	子供有り (年齢不明)	なし	子供2人 社会人, 高校生 (小児喘息)	子供2人 (26才,31才) 孫(1才)	孫(18才)	長男(40才) 孫(幼稚園, 小学4年)
参詣の頻度	年に1~2回 (家族と共に)	・毎月8日 ・1月1日は 家族全員	毎月 の 8,18,28日 にくる	毎月8日 (18年間1 人で)	毎月8日 (1人又は 娘と)	毎月8日 (孫の誕生から)	毎月8日 (1人で)
奉納物	花・賽銭	年月に鏡餅を納める	月1回祈禱してもらう	—	お賽銭	お花お賽銭	お花お賽銭
参詣のきっかけ	祖母のすすめ	実母から	タクシー運転手より	母より	友人より	友人より	近所の人より
近所の知名度	不明	不明(名は知っている)	不明	割合、知っている	知っていると思う	年に1回来ている	不明
職業	夫(放射線技師)	夫(会社員) 妻パート	夫(会社員) 転勤2年目	看護婦(三交替勤務)	会社員(世帯主)	無職	商売
居住地	横山町	東山3丁目	金沢市内	森山町	金沢市	小立野	元江町
生育地	金沢市	金沢市	奈良出身	東山	金沢市	金沢市	小松市
備考	・おまいりする事で心が安定(水子供養) ・家の宗派は浄土真宗	・子供の足が悪かったので、げたを納めた。	・タクシーの運転手に子宝の神様でどこがよいかを聞いた。	・第2子が病弱、寺よりよだれかけをもらい治癒後かえす。	・孫のお多福風邪全快祈願と第2子安産祈願	・今までの祈願がほとんどかなえられた。	

しかし本聞き取り調査中には、奉納物を持参した数は少く、授子祈願のために「柄杓」を奉納した者が1名、足が丈夫になるようにと「下駄」を1名、9か月の孫の健康を願って「よだれかけ」が1名、「子供の写真」を奉納した者が1名となっており、現在では、従来のような奉納物の形は少なくなっているという住職さんのことを裏づけている。

御祭礼日や御縁日には鬼子母神堂に、参詣者による沢山のお花とろうそくが供えられている。

④ 参詣のきっかけ

参詣者は、おしなべて誰からの強要もなく自然な形でお詣りする雰囲気をもっている。金沢に生まれ育ち、母や祖母から聞かされたり、連れてこられたりして、子供の頃からいつ知らず真成寺に慣れ親しんでいる人が多かった。

又、結婚してから姑に聞かされて知った人や、親せきの祖母から聞いた人もおり、多くは、肉親や血縁につながる人からの伝達によって知っているが、「近所の人」や「友人」という血縁関係以外から聞いて知っている人は、71名中11名だけであった。

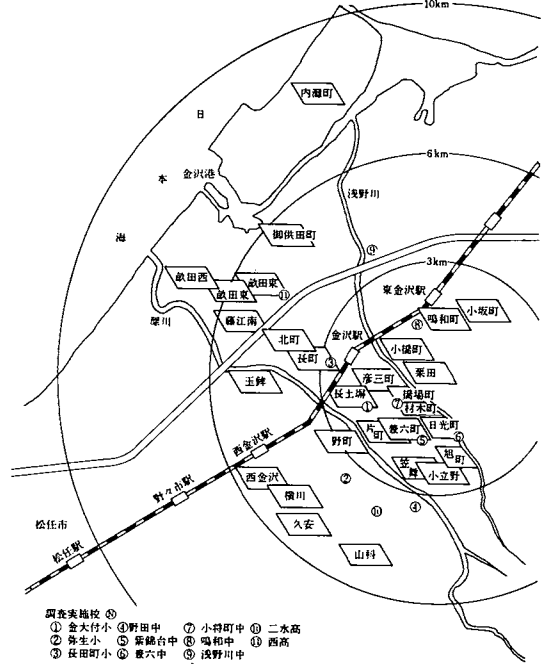
このように、真成寺の名は地縁関係というよりも、祖母から母親へ、そしてその娘へと血縁関係により伝わって知られ、「安産、出産、育児」への願いという時代を問わない女性のささやかながらも一途な祈りの対象として鬼子母神信仰が根強く受け継がれてきている。

そのためか、自分の住む近所の人たちが真成寺を知っているか、どうかについては聞き取りに応じた人の3分の1が「知らない」あるいは「わからない」と答えており、近隣の信心については無関心の人が意外に多いという側面も見せている。

⑤ 参詣者の「居住地」分布

図III-1は、調査に応じた人の居住地を示す。参詣者は、真成寺の存在する東山地区近辺の旧市内を中心に金沢市全域、さらに金沢市外（松任市、小松市、河北郡）とかなり広範囲な地域にわたって居住している。

図III-1 調査対象者の居住地及び調査校の所在地



なお、少数ではあるが、県外から金沢に転入してきて毎月かかぎず参詣している人や、流産をきっかけとして、授子祈願のために毎月訪れるようになった30代の女性等がみられた。

2. 児童生徒とその親の鬼子母神信仰調査

金沢市内の小・中・高の児童・生徒やその親達を対象にして、鬼子母神や真成寺がどの程度に知られているのかについて簡単な調査をおこなった。

1) 調査対象と方法

調査を実施した学校は図III-1における①～⑪の11校である。

小学校は6年男女122名、中学校は3年男女326名、高校は女子生徒395名とそれぞれの父母を対象に、調査用紙に記入する方法で行った。

調査用紙は児童・生徒用と父母用の二種類作成したが、内容はほとんど同じである。表III-3は父母対象のものである。

表III-4 父母へのアンケート用紙

生活文化についての調査

昭和62年1月10日
金沢大学教育学部生活文化研究会

私達の研究グループでは 生活文化の教材化をはかるために地域に伝承されている
産育信仰について調らべているものです。下記のことがらについてのアンケートに
御協力くださいますようお願いいたします。

(回答者) 1 男 2 女
(年代) 1 30代 2 40代 3 50代 4 60代
(お子様を育てられた場所) 1 金沢市 校下(小学校名)
2 金沢市以外の県内
3 県外

当てはまる番号を○でかこんでください。

ア 次の名前を聞かれたことがありますか。
1 卯辰山の鬼子母神 2 ざくろ寺 3 人形寺 4 真成寺 5 聞いたことが
ない。
(あるかたはどなたから聞かれましたか。)

イ 真成寺はアの1~3の順に呼ばれることもありますが行かれたことがありますか
1 ある。 ・どなたと行かれましたか。 _____
・いつ行かれましたか。 _____
・いかれた目的はなんですか。 _____

ウ 子授け 安産 子育て その他の折願でおまいりされたり、借じておられること
なさっておられることがありますしたらお書きください。

例 目的 参加行事 おそなえ	金沢神社 合格折願 月まいり 経路			
-------------------------	----------------------------	--	--	--

エ 鬼子母神や真成寺について知っておられること なさっておられることがありま
したら お書きください。

表III-4 回答総数

調査対象	実 数		比 率
	a. 回答者数	b. 聞いたことのある人	b/a×100(%)
小学生 父 母	122 人	30 人	24.6
中学生 父 母	326	59	18.1
高校生 父 母	216	106	49.1
高校生 父 母	395	86	21.8
高校生 父 母	244	122	50.0

父母の回収率 68.3 %

くろ寺」の順で知っているが、「ざくろ寺」につ
いては、親・子とも少くなっている。「聞いた
ことがある」については、父母は平均半数に達
しているが、児童・生徒はその親の半分にもな
らない。

③ だれから聞いたか

回答のあったものを図III-3に表わした。何
よりも祖母、母から聞いた者が多い。不明の中
にはだれからかはっきりしないとか、小さい時
から知っていた等もあった。児童・生徒の雑誌・
本の中には観光案内や見てあるきのパンフレッ
ト類も含まれている。

その他の質問で鬼子母神や真成寺について知っ
ていることとして、「子育て」に関係があること
や、「人形供養」をあげているのが生徒・父母兩
方に少しずつみられた。産育信仰資料について
書いている父母は3名であった。

④ 行ったことがあるか

真成寺に行ったことがあるということについ
て図III-4にまとめた。金大付小では児童4.7%
、父母20%であるが、長田町小の父母では0であ
る。中学校では野田、兼六の生徒0に対し小將
町は13%であり、父母は小將町中23%、鳴和
中19%に対し野田中は4%である。これは地域
によつてのちがいかと思われる。

だれと行ったかという問いには、家族、友人
をあげているが、なかでも母と一緒に断然多い。

2) 調査結果およびその考察

① 聞いたことのある人数

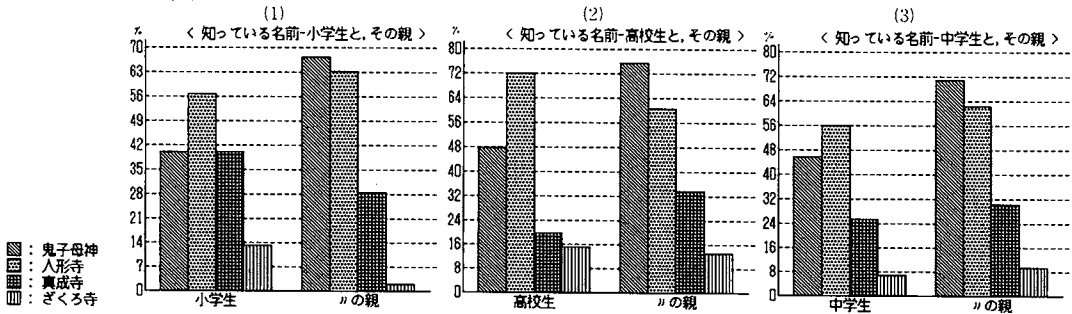
表III-4に回答数とこの寺のことを「聞いた
ことがある」数とその比率を示した。全体の平均
では表のようになるが、学校差がみられ、小
学校では金大付小は児童37%、父母65%であ
り、他の2校に比べ家族から聞いた人数が多い。
中学校では小將町中の生徒45%、父母71%に
対し、浅野川中は生徒10%、父母35%である。
小將町中の校下は真成寺に近く、旧市内の雰
囲気が色濃く残っている地域であるためかと思
われる。小・中の児童・生徒の男女の割合は2
対1で女子の方が「聞いた」というものが多い。

② どんな名前でも知られているか

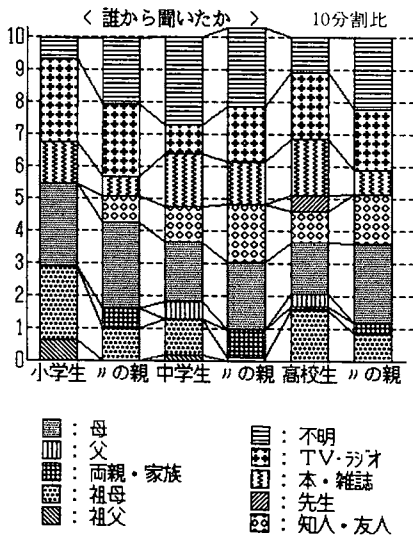
どんな名前を聞いたことがあるかについてま
とめると図III-2(1)(2)(3)になる。

寺を知っている名前は、児童・生徒は「人形
寺」が最も多く「鬼子母神」がそれについて多
い。父母は「鬼子母神」「人形寺」「真成寺」「ざ

図III-2 どんな名前知っているか



図III-3



父母の方では娘、夫、友達が目立った。サークル活動や見て歩き会で行った人もある。

行った目的は、児童・生徒はお参りについて行ったのが多く、人形供養に参加とか習字をならに行っていた等もあった。父母で多かったのは、安産祈願である。自分の時、娘の時、両方の人もある。子育ての祈願も多い。子授け、無病息災、家内安全、全快御礼、水子供養等もみられた。月参りをしている人もあるし、観光で行った人もいる。

3) 調査から

調査前に我々は真成寺について知っているのは、父母はともかく児童・生徒は1~5%前後と推定したが、予想を超えて名前が知られており、行ったことのある人も多いのに驚かされた。

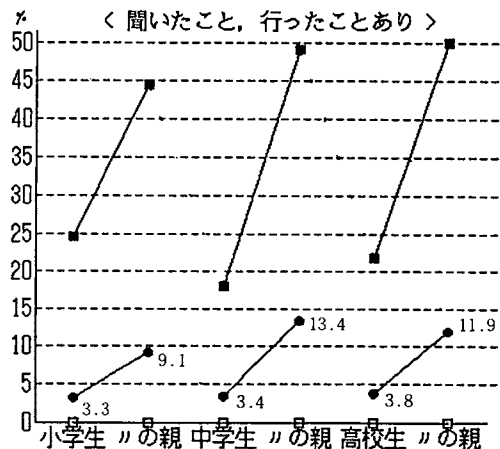
祖母、母、娘と女性をとおしての伝承が推察されるが、これは子授け、子育て等の生み、育てる性として直接に関係するからかと思われる。

人形供養や観光ブームからの知名度も意外にあることや、地域性も関係していることが判った。

まとめ

1. 金沢市における産育文化の形成について、東山にある真成寺を中心にして調査・研究した。
2. 鬼子母神信仰に関連しては、その発生がインドのガンダーラにあり、中国等の諸国を経て日本に渡り、各派の宗教の中に変容していったという経路は知り得たが、金沢の地への定着過程は不十分であり、今後の課題の一つとして残された。

図III-4



● : 行った
■ : 聞いている
各回答者数=100

3. 真成寺に奉納されている諸物のうちの着物類をとりあげ、百徳着物で背守のあるものを抽出して調べた。着物一枚々々の縫製の仕方・針目の跡に、子どもの健康を願う親の心があらわれてみえた。
4. 金沢市内在住の小～高校生とその親達を対象に意識調査をおこない、この寺のことを予想以上に知っていることがわかり、社寺仏閣の多い城下街として発展して来た金沢の特徴があらわれたのかと推測している。
5. 同じく、真成寺参詣者への調査をおこない、現代的に祈願の形は変化しつつも、この寺は今なお多くの人々の産育信仰の対象になっていることがわかった。現代の子生み、子育てにかけられる心理は、年代的に、また、男女の性による特徴がみられた。
6. 最後に主テーマである「教材化」については、2年継続本研究の2年次に持ち越されることになった。
- 1) 本章のほとんどは、宮崎英修編：鬼子母神信仰，雄山閣（1985）によった。
- 2) 腰揚をしない場合、60cm内外を標準身丈（＝着丈）とする。
- 3) 肩揚なしの寸法である。
- 4) 肩揚をした寸法。
- 5) 麻の葉の図型は、×字型とか目かごとか魔除けに使われる幾何学図形と似ているためよく用いられる。
- 6) 真成寺の年中行事については多くの本で紹介されているが、ここでは市教委発行の資料をもとに、真成寺住職深山智山氏にも直接取材し、行事の内容について詳細に聞くことができた。参考資料：金沢市教育委員会、「重要有形民族文化財、真成寺奉納産育信仰資料」，3ページ（1983）
- 7) 子供が健康に育つようにと願って、鬼子母神様に「お預け」する習俗があり、普通その子の写真を寺に持参し、奉納する。

あとがき

紙幅制限のため、多くの資料、集計の表・図等の削除をせざるをえなかった。それでもなお今回は、真成寺奉納物のキモノの一部分をまきぐつたに過ぎない。この調査を通じて私達は、更に金沢の文化へのこだわりが強められてしまった。本グループとしては、家庭科教育の観点から、重文指定のキモノ類を直接手にとってみる事ができたなら、おそらく、私達が頭の片隅でこだわり続けていることへのヒントを得るに違いないと確信している。それは、おそらく、私達のレベルに限られるにせよ、文化と伝統に根づく金沢の歴史的都市空間の一部を埋めてくれるに違いない。

おわりに当り、真成寺住職深村智山氏、金沢市文化課及び民俗資料館の職員の方々に厚くお礼を申し上げたい。今後は、より本研究を深めることで、御援助に報いたいと考えている。

注：

参考文献：

1. 大藤ゆき：児やらいー産育の民俗ー，民俗民話民芸双書26，岩崎美術社（1967）
2. 大藤ゆき：子どもの民族学，草土文化社，（1982）
3. 天野 武：民具のみかた，第一法規出版，（1983）
4. 下中邦彦編：世界大百科辞典，「きもの・うぶぎ」，平凡社（1981）
5. 金沢市教育委員会：真成寺奉納産育信仰資料，金沢市文化財紀要39（1983）
6. 金沢民俗をさぐる会編著：都市の民族・金沢，図書刊行会（1984）
7. 若林喜三郎：石川県の歴史，北国出版社，（1981） 7，雄山閣（1978）
8. Ruth Steven：Knazawa，金沢市観光協会（1986）
9. 中尾 堯：日蓮宗の歴史，教育社（1980）
10. 宮崎英修編：鬼子母神信仰，雄山閣（1985）
11. 渡辺宝陽，中尾 堯編：日本仏教基礎講座